

泌 尿 器 科 紀 要

第 10 巻 第 11 号

昭和 39 年 11 月

随 想

欧 米 所 感

東京大学助教授 新 島 端 夫

私は、昨年10月カリフォルニア大学医学部（サン・フランシスコ）に赴き、約11カ月間同地において私としては初めての下宿生活を体験した。何分異郷の事ではあり、又俄かやもめというあまり芳しくない条件の下では、その生活も決して楽しかったとのみ言えるわけではなく、再び故国の土を踏んで20日余を経た現在でも、過去つた1年を顧みると、やはり「長かつたなあ」という感懐を覚えるのを否定出来ない。ただ幸な事に、最も長く滞在したサン・フランシスコは、その自然美としつくり解け合つた白い清潔な美しい街であり、丘の上の下宿の部屋の窓からは、白い屋並越に太平洋をのぞみ、右手公園の森の彼方にその上半をのぞかせた金門橋の赤い色彩が周囲の緑とよく調和して、ある時は霧に巻かれて見え隠れし、ある時は水平線の落陽に照り映えて燦然と輝き、ともすると郷愁にとらわれんとする心に掛替えのない慰めを与えて呉れたのである。サン・フランシスコの寒暑を知らぬ安定した気候は、世界的に有名であり、1年を通じて公園に、生垣に、そして街頭の花売屋台にと、あらゆる色彩を楽しむ事が出来るが、私の様に日本の生活が根つからしみついているものには、季節の移り変りに伴う独特の情緒がなつかしく、この恵まれた気候条件も、さして嬉しいものとはならなかつた。いづれにしても、一人異国に住み、異国の言葉の中で自我意識を抑圧されながら生活していれば、多少郷愁に悩まされるのは人の常であり、まして国家意識の昂揚にこれ務めている昨今の米国で、又多人種の集団国家でありながら、猶拔き難い白人優越のムードをそこはかとなく感ぜしめられる社会の中で、私の眠っていた民族意識が、ともすると頭をもたげる事が多かつたのも事実である。シスコ滞在中も終りに近づいた6月のある日、海上保安庁の練習船「こじま」が寄港したが、その小さな国産船にはためいている管の「日の丸」を見たさに、桟橋迄ボンコツを飛ばしたのも、この抑圧された自意識のはけ口を求めていたのだと言えぬ事もない。

短時日ではあるが、私の歩いた欧米の所謂近代国家群に於て、物質文明という点では特に驚く程の事はなかつたが、永い歴史と共に培われた社会文化、制度等には、羨望を禁じ得ぬ高い民度、先進性を感じた事も少くない。しかし日本人の楽土は日本にしかあり得ず、且つ作り得ぬと信じていた私には、その羨望が、ある時は子供達が生きて行くべき祖国の将来への憂いとなつて焦りをさそい、ある時は日本の現状への怒りとなつて眠れぬ夜を苦しめられたものである。今再び東京の空の下にまい戻り、あたかも未だ異国の旅の延長にあるかの如き感を抱かしめられる程の著しい変貌に一驚、その世界の一流都市に比べて遜色無い見事な建設ぶり、それを実行し得る実力に喜びを覚えながらも、やはり日本の近代文化国家への道が遙かに遠い事を嘆ずる気持には変る処がない。例えば日本における医学、医療の世界をみてもそれは明かである。現在日本の良心的医師或は医学者が不遇である事はしばしば語られる事であり、事実外地で接触する機会のあつた共産圏も含む各国の医学者達の話す処によ

つても、まづ日本のそれは世界最低の水準といつても過言ではない。勿論学者の不遇は必ずしも医学の世界ばかりではない。しかし特に医学は直接物質文明に結びつく自然科学とも、又人間の精神的本質のみを場として追求する人文科学とも異り、過去、現在、未来を通じ人類の存続する限り、その喜怒哀楽と結びついて最も人間的に、最も科学的に求められ高められるべき科学の中の科学、文化の中の文化である筈である。そこには戦争や平和、社会の変革などと何等関る処はないわけである。そしてその分野で良心的に努力する人達或はこれを志し努力せんとするものが、苦しみ追わねばならぬ現状、制度又は低劣な水準を導き実行している国が、或はその様な体系によらねば成立つて行けない国が、果して近代文化国家への道を歩んでいると言う事が出来るであろうか。

私はその原因を政治家そのもののみに帰するつもりはない。医学のみならず、人間社会においてその基盤をなすべき文化的な各分野にもたらされている荒廃は、日本を覆うムード、即ち日本人全般の民度の低さと、文化に対する歴史の浅さの反映であると考えざるを得ないのである。苦しい敗戦にも拘らず、それに引続いて押寄せたきらびやかな物質文明の波浪は、人間の歩むべき、より格調高き道程について、反省する機会を我々の国から押流してしまつたかとも思われる。

私の訪れた国の中でも西独などは、同じ敗戦国ではあり、しかも東西に分割されてより以上の苦しい国情が想像され、その喧伝される復興状況も、一見したところ祖国日本の方が明かに「はで」ではあるが、よくみればそれは人間の考え方の相違であり、金をかける場所の違いに過ぎない。私の見た僻地の大学病院一つをとつても、施設、人件費など戦勝国米国のそれと著差はない。又一般国民は少くともそれを不思議とせず、学問は尊ばれ、学者は大切にされ、人々の生活は質実で足が地についている。即ち軍閥によつて両度に亘り悲惨な破壊をこうむりながら、学問をもつて世界に君臨した歴史を誇るドイツ国民一般が、人生においては何を尊敬し、何が高く評価さるべきかを判断し得る高い民度を維持し続けているからに外ならない。かくあつてこそ初めて彼等が近代文化の恩恵を共に楽しみ、共に浴し得る事を知っているのである。所謂先進国で目につく立派なものは、教育、研究施設、美術館、図書館そして病院、住宅、道路であり、決して料理屋やキャバレー、デパートや御殿ではないのである。この歴史の差に基く民度の違いと、それに拍車をかけた様な、利己的な一部政財界のボスや役人達の不見識が次第に醸し出した浮薄なムードを改革する事は至難の業であろう。しかしこのムードがある限り、学問や、そして学者の環境が良くなるわけがなく、ひいては医療制度、医師の立場などの真の改善、進歩は望み得べくもない。保険点数や単価の操作の如きは、本来の医学や医療とは無関係の全くナンセンスなごまかしに過ぎない。

一方この憂うべき現況を導き且つ維持せしめている責任の一部は、学者や医師、特にその指導層にも帰せられる事になる。丁度一時代前の文化的指導者達が、国民をあの悲惨な戦への道から救う事が出来なかつた様に、もし将来日本が浮草の様にひよわなショッピングセンタースタイルの国家になり果てて嘲笑を貰うか、或は逆に再び国の面目をかけてのピストルやサーベルの勃興を招き、人間としての道理が抑圧される時代が来たとすれば、やはりそこには小難をおそれ、あえて信ずる事を述べる事なく、学者である事を理由に自衛的態度に終始した文化的指導者が認められるに違いない。「学者は学問をしていればよい」という言葉をよく聞く。しかしこの国でも学者はやはり常に社会の一方の指導者である。まして学問の進歩とその前提たる環境の改善は、すべての責任ある立場の学問的指導者達の献身的な努力、あらゆる機会での説得と論争に頼るムードへの反撃なくして期待する事は出来ない。この様な努力が、学者として所謂研究論文を山積する努力に優るとも劣らぬ責務であり、時には国家の将来或は学問の進歩への点に実質的な貢献ともなる事は云々する迄もない。

今多少ずれたベース、ずれた頭で再び自分の職場に舞戻つたものの、自分の今迄やつて来た事、やつている事と医学という学問との関聯に於て、疑惑を覚え、いささか自信喪失の気味ある今日此頃という処である。